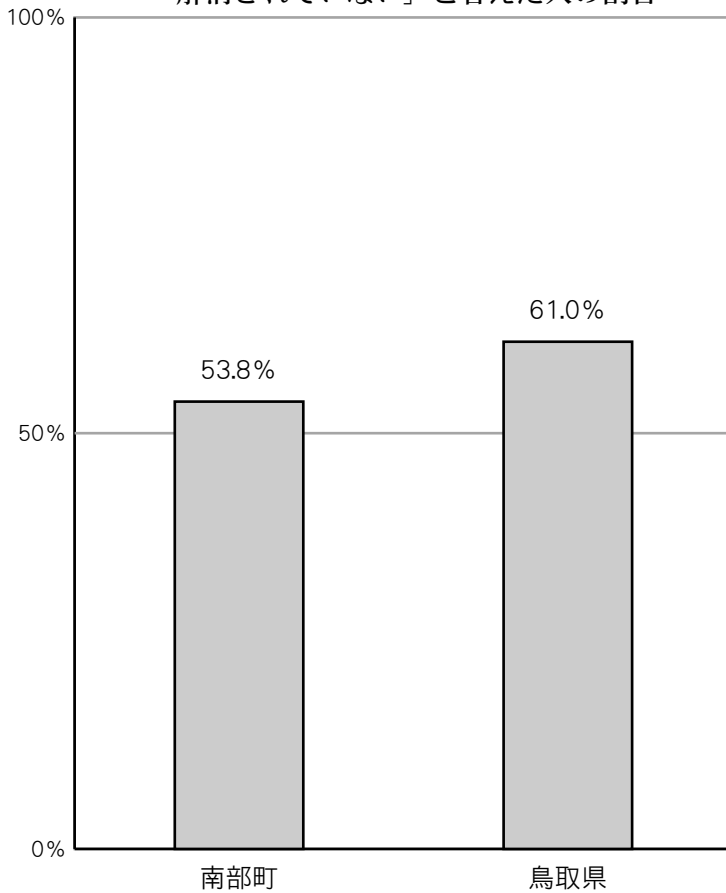


偏見や差別のない社会を目指して

# みんな幸せになりたい

同和地区への差別意識は「現存している」または「解消されていない」と答えた人の割合



近年行われた南部町の人権問題意識調査の結果によると5割の人が、鳥取県の調査では6割の人が、同和地区への差別意識は「現存している」または「解消されていない」と答えています。

同和問題の中でも、最も残っている

近年では同和問題の学習も多く取り入れられるようになり、「残っているのはおかしい」「あつてはいけない」と考える人も多くなっています。

しかし、同和地区のひととの結婚となると、自分だけの問題ではない「親

戚に迷惑がかかる」「身内の付き合いがでなくなる」など、自分たちにはどうしようもない差別だと考えている人々も少なくありません。部落差別が現存しているということは、同和地区以外にも悲しい思いをしている人がいるのです。偏見を取り除いて、みんな幸せになりたいと思っています。

妹の結婚で、自分と家族が差別を越えるまでの思いを詩にした一部を紹介いたします。

「手」

私の妹と結婚させてほしいと父母の前で青年が手をついたとき「まだ若すぎる」といった父の手が震えているような気がした。

それからオロオロと母が泣き父は「申し訳ないことだ・・・」と親戚に手をついて回りただただ酒をあおる父の手は細かった。

一度は結婚をあきらめかけた妹を夜逃げさせるように彼の元へ旅させた夜の闇のなかへ消えてゆく妹の後ろ姿に手を振ることしかできなかった。

やがて私も一人の女性にめぐりあい彼女の手のぬくもりを知ったけど、妹のことはなかなか話せないでいた。

わたしのなかに差別しているわたしを見つけた時たまたまなく自分が嫌いになった。けれど、どう生きていくかを考えた。

それから何年かして部落解放文化祭で劇を見た。

ひざの上の妹の子のやわらかくも確かな命をぐつぐつとだきしめた。

今年の冬のことだった。

親戚が集まった夜に「同和教育」の話になったとき「差別は許されないことだ」とさかすかきをもった父がきつぱりと言った。

(奈良県同和教育研究大会・特別報告の一部より抜粋)